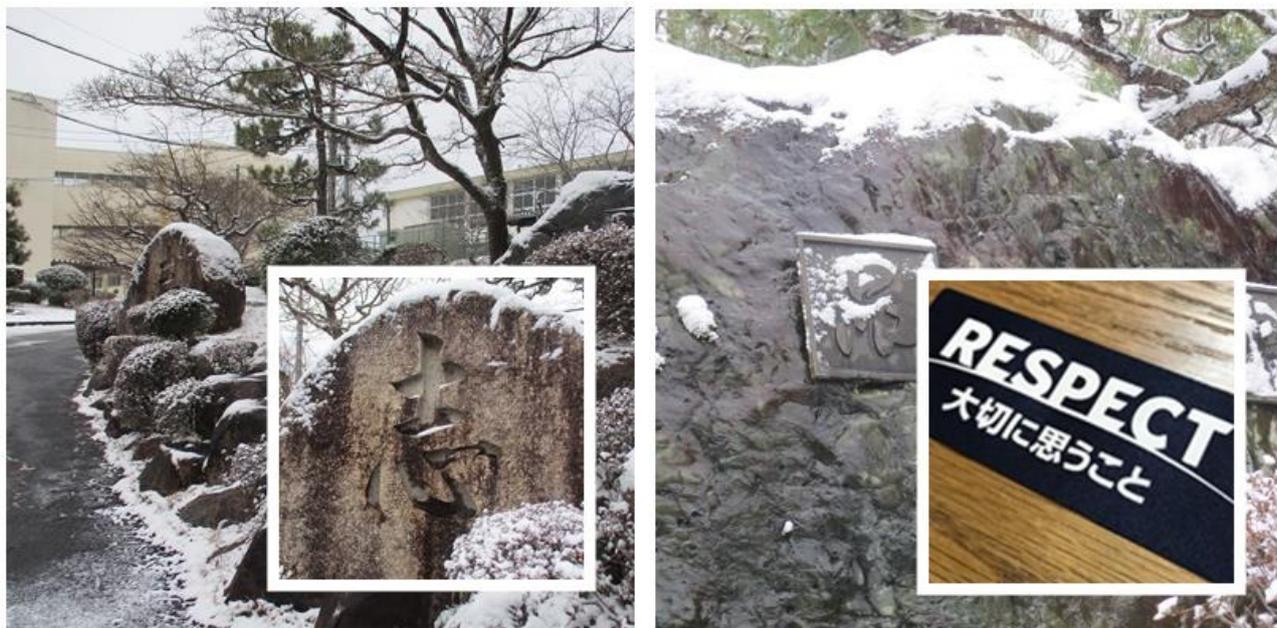


大切に思うこと



品野坂を上がり校舎が見えてくると石碑が視界に入る。「品中」と書かれた石碑と「志」と書かれた石碑である。いつも品中生を見守ってくれている。雪をかぶっても。品中の大切なシンボルである。

“リスペクトプロジェクト”、それは、日本サッカー協会が数年前から展開している。リスペクト（尊敬・敬意）の本質を、常に全力を尽くしてプレーすること、そしてそれはフェアプレーの原点であると捉え、サッカー界におけるリスペクトの重要性を提唱している。レフェリーが腕につけるリスペクトワッペン【RESPECT～大切に思うこと～】の形は時代とともに変わってきたが、フェアプレーの精神やリスペクトの精神がそこに宿っている。サッカーの試合は、選手・チームと審判だけではできない。もちろん他の競技も同じであるが、大会を運営する人、競技場の維持管理をする人、救護員、試合を応援する人などなど、多くの人が関わっている。それら全ての人がお互いを「大切に思うこと」で試合の価値は無限に向上する。学校もよく似ているように思う。学校に関わる全ての人たちが互いを「リスペクトし、大切に思うこと」、学校はいつもそういう場であり続けたい。私自身、サッカーの審判活動を続けてきて、大切に思うことをたくさん学ばせていただいた。そして、それは、教育の世界に通じることも多々あったように感じる。「選手たちの最高のパフォーマンスを引き出してやろう」その昔、ゲーム前のミーティングで先輩からかけていただいた言葉である。自分の担当する試合が、選手たちにとって、そして選手たちを支える多くの人たちにとって、宝物になるような試合にすることをつねに念頭に置いてきた。思い出する大会の準決勝。試合開始早々にイエローカード。試合は逆転また逆転の好ゲーム。レベルの高いゲームコントロールが求められた。2対2、このまま延長戦かと思われた最後の1プレーで、決勝ゴール。そして、終了のホイッスル。勝利の歓喜に浸っている選手がいる中、負けたチームの選手は落胆しその場からしばらく動けなかった。ゲーム終了のセレモニーをするため、ボールを取りに行こうとしたときのことである。負けたチームのキャプテンが、ゴールの中にあるボールを走って取りに行き、私のところまで持ってきてくれた。そして、「最後まで、ジャッジ、ありがとうございました」と。宝物になった試合の一つである。